

# 名古屋市域に被害をもたらした水害年表

和暦(新暦)	災害の種類	被害程度
正徳4年8月8日 1714年9月16日	暴風雨・洪水・高潮	庄内川が大出水し、味鏡堤が破堤、はん濫した。伊勢湾沿岸に高潮が起り、海西郡愛知郡の新田(神戸・鳥ヶ地、甚兵衛、伝馬、大宝等)堤防を破堤した。
<b>1716年 吉宗が8代将軍となる</b>		
享保7年8月14日-15日 1722年9月24日-25日	暴風雨・洪水・高潮	熱田では裁断橋以東、井戸田“うつくしの森”までの間、民家はことごとく流失し、熱田神宮の第一の鳥居、浜辺の鳥居は倒壊し、ここだけでも多くの死者が出た。(約4,500人)
<b>1732年 享保の大飢饉</b>		
元文4年8月29日-9月1日 1739年10月2日-3日	大雨・洪水	庄内川堤防が萬場の南の左岸で破堤し、名古屋市西部一帯の稲葉地、中村以南がドロ海となった。また、山崎川の堤防も破壊した。
寛延3年4月13日 1750年5月18日	大雨・洪水	庄内川が大出水して、生棚(現北区楠町内)で堤防が切れ、土砂が数haの農地に流入した。また、八田川の堤防も一部破堤して、味鏡・如意(現北区楠町)は浸水した。
宝暦7年4月-5月 1757年5月-6月	長雨・大雨・洪水 (宝暦の洪水)	庄内川右岸、味鏡・比良・大野木・土器野(現新川町)などで破堤。八田川・御林付近で五条川筋の法界門橋付近でそれぞれ破堤。矢田川の上条・志段味・印場等数か所破堤。名古屋城下は、対岸の破堤で無事だったが、藩は救助舟を出し、食糧を送った。
明和4年7月10日-12日 1767年8月4日-6日	大雨・洪水 (明和の洪水)	庄内川は右岸の比良・大野木(現西区)、土器野松原(現新川町)などで破堤して、はん濫し、味鏡・如意など一帯がドロ海となる(宝暦の洪水と同様)。矢田川は猪子石で破堤し、名古屋の中下門前まで、はん濫。名古屋の北東部から西部にかけて低地全部が浸水(長母寺北で山崩れ)。名古屋城西の道路上で水深約1.5mになり、数日間船で往来したという。名古屋南部は天白川のはん濫で、鳴海あたりまで浸水し、鳴海付近では、家屋の水害が大きかった。
安永8年8月20日-25日 1779年9月29日-10月4日	大雨・暴風雨・洪水	庄内川が増水し、志段味・上条・味鏡・比良・大野木の堤防が決壊はん濫し、南は小田井堤、東は木津川、西は五条川、北は小牧に至る間に浸水した。天白川もはん濫して、鳴海の東海道の往来が途絶した。全般に田畑・人畜の被害が大きかった。
天明2年6月23日 1782年8月1日	大雨・洪水	五条川左岸で、清州村の朝日付近から下流へ8か所、また合瀬川が六ツ師村で2か所(約180m)、それぞれ破堤して、田畑にはん濫した。その後8月21日までに4回のはん濫があった。
<b>1782年 天明の大飢饉</b>		
天明3年 秋 1783年	大雨・暴風雨・洪水	連日の大雨のため庄内川が出水し、大野木(現西区山田町)で堤防が崩れた。さらに暴風雨となり、決壊はん濫の危険が増したが、幸い大事に至らずに済んだ。
寛政3年8月20日 1791年9月17日	暴風雨・洪水・高潮	熱田から西の新田の堤防はことごとく被害をうけた。倒壊家屋は、名古屋49棟、熱田28棟、東春日井郡三ッ淵村(現小牧市内) 33棟、中島郡起村70棟、丹羽郡岩倉下市場14棟がわかっている。
享和2年6月27日 1802年7月26日	暴風雨・洪水・高潮	熱田新田をはじめ伊勢湾沿岸では高潮により、家屋が流され死者も多かった。
文化5年7月25日 1808年9月15日	暴風雨・洪水・高潮	8時頃から、東風が強くなり、さらに西へまわったとき熱田の海岸に、高さ2.5m位の高潮が押し寄せた。また宮(熱田)から師崎の間で、船60隻ばかりが被害を受けた。
<b>1833年 天保の大飢饉</b>		
嘉永3年8月3日-10日 1850年9月8日-15日	大雨・暴風雨・洪水	庄内川は味鏡・比良村で破堤し、小田井の上中下の三郷が浸水。矢田川は瀬古村まで破堤。天白川は中根村(現瑞穂区内)で破堤し、笠寺から熱田の築出まで浸水。
<b>1854年 アメリカの使節ペリー来航、日米和親条約を結ぶ</b>		
安政2年7月26日-29日 1855年9月7日-10日	暴風雨・洪水	庄内川・矢田川・新川がはん濫して、村落・農地を浸水した。矢田川の堤防が破堤して、白沢筋があふれ、幸心・金屋坊・大永寺大森垣外などが2日間冠水、床上浸水した。上志段味村では、野添川が破堤したため流失家屋があった。下志段味村では14haに土砂が入り、冠水は3日に及んだ。天白川では、中根村(現瑞穂区)で堤防が決壊し、さらに山崎川でも決壊した。
安政2年8月20日 1855年9月30日	暴風雨・洪水・高潮	伊勢湾・渥美湾に高潮が起り、伊勢湾沿岸の新田堤防や海岸堤防91か所が決壊した(知多半島から海部郡まで)。流失家屋130棟、死者20人の被害があり、特に甚だしかったのは堀川・庄内川の間築地前・熱田前・稲富・永徳・神宮寺の新田であった。
<b>1858年 井伊直弼が大老となり、アメリカ、ロシア、イギリス、フランスと修好通商条約を結ぶ</b>		
慶応元年5月18日 1865年7月10日	大雨・洪水	庄内川が出水し、左岸の瀬古村(現守山区)・中切村(現西区)、右岸の味鏡村(現北区)・勝川村(現春日井市)で破堤して、はん濫、一帯に大水害をこうむった。
<b>1867年 大政奉還</b>		
明治元年4月-5月 1868年4月-5月	長雨・大雨・洪水	庄内川が出水し、17か所(左岸約1,450m・右岸約1,400m)で破堤した。勝川・松河戸・下津尾・下條・和爾良・高蔵寺・味鏡・志段味・瀬古・幸心・川中・中小田井・上小田井・大野木の各村が水害をこうむった。
明治元年8月1日 1868年9月16日	大雨・洪水	庄内川水系が出水し、庄内川の上・中・下志段味村、他の各所で堤防が決壊した。矢田川でも瀬戸村・瀬古村・成願寺村・中切村・福徳寺村等で破堤して、家屋流失や死者もでた。名古屋も巾下付近で家屋の浸水が甚だしく、本町・広小路・赤塚(当時は小川が溝が多かった)も床下浸水した。
<b>1877年 西南戦争</b>		
明治14年9月13日 1881年	暴風雨・洪水・高潮	熱田では、高潮により、水害は惨状をきわめ浸水は床上1mぐらいにもなった。伝馬町の裁断橋が流失。港内の船は街にあがった。大瀬戸町・白鳥町・神戸町が浸水した。庄内川が出水はん濫し(下志段味村落合で約18m破堤)、江川・黒川へ流れて名古屋西部の住家に浸水、床上1mにもなった。
明治17年7月12日-19日 1884年	大雨・洪水	庄内川は洗堰の西瓢単堤約180mが決壊してはん濫した。庄内川では計5か所(左岸150m、右岸240m)の堤防が決壊した。
<b>1885年 伊藤博文が初代内閣総理大臣になる</b>		
明治22年9月11日 1889年	暴風雨・洪水・高潮	熱田では高潮が来襲し、豊田・柴田・笠寺・伝馬・星崎の各新田一帯に浸水。
<b>1889年 大日本帝国憲法が公布される</b>		
明治24年9月29日-30日 1891年	暴風雨・洪水	愛知県猪子石村地内の香流川・矢田川が増水し、堤防が9か所(約180m)崩れ、1か所(約35m)決壊、山崩れ1か所、道路破損1か所(約10m)、田畑浸水20ha、家屋浸水2棟。名古屋市池田町付近は、膝に達するほどの浸水。
<b>1894年 日清戦争</b>		
明治28年7月29日-31日 1895年	長雨大雨・洪水	名古屋市内の江川があふれて、外田町・北鷹匠町などで、家屋に床下浸水したほか高岳町付近一帯や堅代宮町付近などで道路冠水や床下浸水があった。
明治29年7月19日-21日 1896年	大雨・洪水	明道町・藪下等で特に家屋の浸水が多かった。庄内川は新川付近で内水はん濫し、水場輪中・小田井輪中の田畑が浸水。愛知郡日津村(現中村区)で庄内川が破堤。

和暦(新暦)	災害の種類	被害程度
明治29年8月30日-31日 1896年	暴風雨・高潮	台風により、尾張地方の被害が甚大で、なかでも海岸地方では高潮により、各新田は大きな被害を受けた。名古屋では、死者1人、負傷者3人、住家全壊50棟、半壊51棟、家屋流失7棟、浸水233棟などの被害があった。
明治29年9月4日-11日 1896年	大雨・洪水	本州中部の琵琶湖付近から濃尾平野にかけては記録的な豪雨が集中して、中小河川は、はん濫し、大規模な浸冠水が起り、家屋・農地の被害が甚大であった。名古屋では、床上浸水779棟、床下浸水9,365棟の被害があった。
<b>1904年 日露戦争</b>		
明治40年8月15日 1907年	暴風雨・洪水・高潮	台風により、住家の浸水、床上425棟、床下8,174棟。築港で、堤防5か所ほか破壊、材木3,900本流失。熱田港で行方不明の船23隻。精進川があふれ、熱田町の羽城・浮島付近の低地一帯に浸水。
明治41年8月7日 1908年	暴風雨・洪水	台風により、床上浸水179棟、床下浸水6,379棟の被害があった。中でも前津小林町(126棟)、古渡町(146棟)、日置町(108棟)、高岳町(235棟)、東新道町(110棟)などでは100棟を超えた。
明治44年6月19日 1911年	暴風雨	台風により、愛知県全般に暴風雨になり、死者、行方不明者約60人、住家全壊約400棟に及び海上の船の被害も大きかった。名古屋市では、鍋屋上野村・名古屋兵器支廠倉庫1棟、帝国製陶所工場1棟、鶴舞公園大観亭1棟、小学校校舎2棟全壊、このほか建物被害46か所。名古屋港では倉庫1棟の全壊のほか施設の被害が大きく、防波堤・護岸・石堤の破損が甚大。港内の船流失・沈没約20隻、死者4人。熱田・羽城町約200棟浸水。
明治44年8月4日 1911年	暴風雨・洪水・高波	台風により、天白川・山崎川がはん濫して、右岸流域の愛知郡笠寺村星崎・熱田町八町畷等が浸水。名古屋市笈瀬川沿いの停車場裏等が浸水。床上浸水31棟、床下浸水3,671棟の被害があった。
大正元年9月22日-23日 1912年	暴風雨・洪水・高潮・高波	台風により、名古屋港の突堤、稲永新田の堤防などが高潮によって破壊されて、一帯に大被害をうけた。(名古屋港の最高潮位は観測基準面上4m60cm、普通の満潮位より約2m高かった。名古屋市では死者29人、行方不明10人、負傷者29人の被害があった。
大正2年10月3日 1913年	暴風雨・高潮	台風により、熱田警察署管内で、床上浸水912棟、床下浸水761棟、堤防4か所で破堤する被害があった。
<b>1914年 第一次世界大戦</b>		
大正8年8月14日 1919年	大雨	大雨により、老松町(現中区)方面で、家屋約500棟に浸水被害が生じ、また鳴海町では扇川が約13m決壊し同町で50棟浸水した。
大正10年7月26日-28日 1921年	強雨・雷雨	雷雨により、天白川、扇川が増水し、4か所で堤防が決壊し、床上浸水200棟、床下浸水1,500棟の被害があった。
大正10年9月25日-26日 1921年	暴風雨・洪水・高潮	台風により、名古屋南部海岸は高潮のため、稲永新田堤防が約110m、新堀川堤防が内田橋の南で1か所、大江川堤防が本星崎町で2か所決壊し、田約200haに浸水した。名古屋港付近では、家屋床上浸水1,815棟、床下浸水610棟、一時は2階まで浸水した家もあり、家屋の倒壊住家8棟、半壊3棟、また西築港で100トン以上の船3隻が沈没、その他の船100隻に被害があった。
<b>1923年 関東大震災</b>		
大正14年8月14日-15日 1925年	大雨・洪水	台風により、死者1人、住家の床上浸水112棟、床下浸水9,479棟、堤防決壊2か所、橋流落4か所などの被害があった。
大正14年9月11日 1925年	暴風雨・洪水	台風による暴風雨で多くの電柱が倒れ全市暗黒となり街路樹も無数に倒れた。豪雨のため市内の各川出水はん濫、下水のはん濫により市内外の交通が途絶した。床上浸水は511棟、床下浸水は15,051棟。名古屋港内の被害も大きく、堀川係留中のいかだは激浪にもまれて無数に破壊され、港内では約1,000トンの船をはじめ小型船破損3隻、帆船の沈没3隻。
昭和5年7月31日 1930年	大雨	東区鍋屋上野汁谷地内で吉淀川支流の堤防が矢田川に入る付近で1日4時頃決壊した。浸水冠水した水田約10ha。
昭和9年9月21日 1934年	暴風雨・高潮 (室戸台風)	県下での被害は主として強風によるもので、降雨は一般的には少なかった。名古屋市では、死者4人、負傷者51人、住家全壊16棟、半壊30棟、電柱の倒伏141か所などの被害があった。
昭和10年8月17日 1935年	落雷・突風・ひょう害	県下各地に強い雷が発生し、落雷、降ひょう被害が各方面にあった。南区では落雷により死者1人が発生した。
昭和10年10月27日 1935年	強雨	雷を伴った激しい雨により、東区鍋屋上野で小川の堤防が10m崩れ、天白村植田で天白川に転落行方不明者1人、床上浸水54棟、床下浸水は10,976棟あった。
<b>1939年 第二次世界大戦</b>		
昭和25年9月3日 1950年	暴風雨・突風 (ジェーン台風)	台風により、死者3人、重傷者2人、軽傷者10人、住家全壊13棟、半壊63棟、床下浸水251棟、稲作被害面積3,350haなどの被害があった。
昭和27年7月10日-11日 1952年	豪雨・洪水	豪雨により、天白川、山崎川の増水はん濫をはじめ、西三川地方の小河川がはん濫し大被害になった。また名古屋市内の名古屋駅前・大曾根・瑞穂区五反田・堀田・昭和区・高辻・中村区大門・千種区本山の道路は水深50cm～60cm浸水し、9小学校が登校不能のため休校した。
昭和28年9月25日 1953年	暴風雨・洪水・高潮・高波	台風により、負傷者3人、建物全壊2棟、半壊1,984棟、一部破損4,195棟、床上浸水8,726棟、床下浸水34,124棟、堤防決壊12か所などの被害があった。名古屋市を始め、6市26町76村に災害救助法が適用された。
昭和32年8月7日-8日 1957年	強雨	名古屋と多治見を結ぶ狭い地域に雷を伴った短時間の集中豪雨があった。庄内川が大正14年来の大増水となったのをはじめ、付近の小河川や池は大半がはん濫し、高蔵寺・志段味方面の山では、地すべりのため山容が一変したほどだった。家屋全壊5棟、床上浸水1,937棟、床下浸水11,865棟、堤防決壊3か所などの被害があった。
昭和34年9月26日 1959年	暴風雨・洪水・高潮・高波 (伊勢湾台風)	超大型台風でしかも東海地方の西を通ったので、東海地方は暴風雨となり、とくに伊勢湾周辺の風は激烈をきわめ、県下では三河北西部の山間部を除いて全域が30m/秒以上の暴風となった。台風の中心が通過する前2～3時間は、時間雨量40mm～70mmの激しい雨が各所で降り、河川は急に水かさが増して、これと高潮により河口付近では至るところで堤防が決壊して大災害となった。
昭和36年6月23日-29日 1961年	大雨 (昭和36年 梅雨前線豪雨)	長期間にわたって梅雨前線が日本付近を東西に横たわり、北上南下を繰り返しながら広範囲に大雨を降らせた。名古屋では総降水量が397.5mmを記録し、床上浸水2,752棟、床下浸水53,387棟の被害があった。名古屋市には災害救助法が適用された。
昭和36年9月15日-16日 1961年	大雨・強風 (第2室戸台風)	室戸台風・枕崎台風・伊勢湾台風に次ぐ超大型台風の来襲により暴風雨となったが、雨は上陸前日の雷雨の方が激しく、16日は風の方が強かった。高潮が起こったが、干潮時にあたっていたため大事には至らなかった。福田川が破堤し中川区富田町でも150棟程度の家屋が浸水した。名古屋市内では、死者1人、負傷者47人、床上浸水16棟、床下浸水561棟、全壊家屋73棟、半壊家屋211棟の被害があった。
昭和37年7月2日-5日 1962年	大雨・洪水	梅雨前線が本州付近に停滞し、低気圧が通過するごとに前線を刺激し大雨を降らせた。名古屋駅前は一面のドロ海になり、山崎川、天白川は危険水位となり野並橋は流失し、要橋は半壊した。千種区猪高町の16,000㎡の杖野池の堤防は決壊し、同じく鍋屋上野の茶屋ヶ坂池ははん濫して付近の住家や田畑を浸水させた。床上浸水は643棟、床下浸水は9,546棟の被害があった。

和暦(新暦)	災害の種類	被害程度
<b>1964年 東京オリンピックが開催される</b>		
昭和39年8月3日 1964年	強風雨・突風・雷雨	夕刻頃名古屋を通過した雷は猛烈で、名古屋市内を約2時間も暴れまわり、87.5mmの大雨を降らせた。名古屋駅前には膝を没する冠水で、ドロ水は地下街にも流れ込み大騒動となり、豊田ビル1階の名店街40店舗にも浸水した。山崎川が大増水して祐竹橋の一部が破損して通行止となったり、呼続町では床上浸水した家屋もあった。
昭和42年7月9日-10日 1967年	大雨 (昭和42年7月豪雨)	梅雨前線の活動により西日本一帯に大雨が降り、大水害となった。名古屋市でも緑区や千種区でガケ崩れがあり、床上浸水296棟、床下浸水14,954棟の被害があった。
<b>1970年 日本万国博覧会が開催される</b>		
昭和45年7月30日 1970年	強雨・雷雨	偏西風帯の気圧の谷と九州南海上にあった台風6号による影響で雷を伴う大雨となった。南部の低地帯～東部丘陵地帯に被害が集中し、名古屋市内では死者3人(昭和区及び緑区)、負傷者4人、床上浸水4,452棟、床下浸水35,068棟、全壊家屋2棟、半壊家屋6棟、堤防決壊4か所、山・がけ崩れが3か所が発生した。
昭和46年8月30日-31日 1971年	暴風雨 (台風第23号)	台風による大雨により、当時気象台開設以来第1位の日降水量202.0mmを記録した。家屋全壊3棟、半壊9棟、床上浸水2,599棟、床下浸水25,813棟、堤防決壊3か所などの被害があった。
昭和46年9月26日 1971年	暴風雨 (台風第29号)	小型の台風であったが、雨量は極めて多く1時間最大82.0mm、10分間最大20.5mmは当時気象台開設以来の記録となった。床上浸水3,291棟、床下浸水60,842棟、半壊家屋3棟などの被害があった。
昭和47年9月16日-17日 1972年	暴風雨 (台風第20号)	伊勢湾台風と似たコースを辿り、高潮が発生、推算値より2m25cm高くなった。名古屋市内では、死者1人、負傷者9人、床上浸水86棟、床下浸水480棟、全壊家屋8棟、半壊家屋80棟の被害があった。
昭和49年7月24日-25日 1974年	大雨	台風第11号の弱まった熱帯低気圧が、非常に高温多湿の気流を送り込んだことにより伊勢湾周辺の広範囲に強い雨をもたらした。床上浸水2,884棟、床下浸水40,463棟などの被害があった。
昭和51年9月8日-14日 1976年	暴風雨 (台風第17号)	台風第17号が九州南西海上で停滞、前線も本州上で停滞して長期間にわたって大雨となった。名古屋市内では、床上浸水3,610棟、床下浸水62,959棟、半壊家屋217棟の被害があり、災害救助法が適用となった。
昭和54年9月24日-25日 1979年	大雨	大雨により、名古屋市内では床上浸水1,613棟、床下浸水30,290棟の被害があり、道路損壊28か所、堤防損壊5か所、土砂流出が34か所が発生した。
昭和55年8月26日-27日 1980年	大雨	大雨により、名古屋市内では床上浸水413棟、床下浸水13,028棟、半壊家屋1棟の被害があった。
昭和57年8月8日 1982年	大雨	市北西部を中心に、雷を伴った集中豪雨があり、床上浸水398棟、床下浸水14,131棟などの被害があった。
昭和58年9月28日 1983年	大雨 (台風第10号)	台風第10号が温帯低気圧になったのちに、秋雨前線を刺激し、集中豪雨に見舞われた。小学生など死者4名、床上浸水672棟、床下浸水15,291棟、道路損壊22か所、堤防損壊11か所などの被害があった。
昭和62年9月25日 1987年	大雨	大雨により、床上浸水127棟、床下浸水2,380棟の被害があった。
平成3年9月18日-19日 1991年	大雨 (台風第18号)	台風第18号と前線により紀伊半島から東北地方の太平洋側にかけて大雨となった。名古屋市内では、建物全壊1棟、床上浸水1,995棟、床下浸水6,731棟、道路損壊18か所、堤防損壊29か所などの被害があった。
平成6年9月15日-18日 1994年	大雨	秋雨前線の活発な活動により大雨となった。床上浸水105棟、床下浸水3,462棟、道路損壊9か所などの被害があった。
平成10年9月21日-22日 1998年	大雨・強風 (台風第7.8号)	台風第8・7号が2日連続で上陸し、強風と大雨となった。強風による転落転倒などで死者2人、負傷者56人、建物半壊4棟、床上浸水1棟などの被害があった。
平成12年9月11日-12日 2000年	大雨・洪水 (東海豪雨)	集中豪雨により、新川の決壊や河川からの越水により大量の泥水が市街地に溢れ、また、排水能力を超えた降雨により低地が冠水するなど都市型災害としては過去に例を見ないほどの大規模な水害となった。
平成16年9月5日-6日 2004年	大雨	瑞穂区を中心に大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害があった。
平成20年8月28日-29日 2008年	大雨・洪水 (平成20年8月末豪雨)	本州付近に停滞した前線に向かって南からの非常に湿った空気の流れ込みが強まり、さらに、上空には寒気が流れ込んだことから大気の状態が不安定となって、中国、四国、東海、関東、および東北地方などで記録的な大雨となった。名古屋市では建物半壊1棟、床上浸水1,175棟、床下浸水9,929棟の被害があった。
平成23年9月19日-21日 2011年	大雨・洪水	台風からの暖かく湿った空気が大量に流れ込み、停滞する秋雨前線が刺激され、記録的な大雨となり、庄内川が志段味付近で越水した。死者3人、負傷者7人、一部破損1棟、床上浸水61棟、床下浸水317棟の被害があった。

※「愛知県災害誌」、「名古屋市地域防災計画」及び「名古屋市気象災害誌」より、名古屋市域で被害が大きかった主な風水害を抽出

#### 〈参考文献〉

- (財)日本気象協会東海本部 (1980)『名古屋市気象災害誌』名古屋市
- 新修名古屋市史編集委員会 (1997)『新修 名古屋市史 第8巻 自然編』名古屋市
- 新修名古屋市史資料編編集委員会 (2008)『新修名古屋市史 資料編 自然』名古屋市
- 名古屋市消防局総務部職員課編 (2014 - 2015)『東海望楼 2014年3月号～2015年6月号』名古屋市消防局望楼会
- 名古屋市消防局防災部防災室編 (2001)『東海豪雨災害に関する記録』名古屋市
- 名古屋市総務局調査課編 (1961)『伊勢湾台風災害誌』名古屋市
- 名古屋市防災会議地震対策専門委員会編 (1974)『名古屋市における既往の地震とその災害』名古屋市
- 名古屋市防災会議地震対策専門委員会編 (1978)『濃尾地震文献目録』名古屋市
- 名古屋地方気象台監修 (1971)『愛知県災害誌』愛知県
- 名古屋地方気象台編 (1962)『東海地方に影響のあつた台風』気象協会名古屋支部

